

## 学問は格闘技である

### 1. 教育を考える一言

「学問は格闘技である」：この言葉との出会いは学部時代。所属していたゼミの裏テーマ。

「学問は格闘技である」がゼミの裏テーマでした、なんていいますと、「ずいぶん過激なゼミだな」なんて、怪訝な顔をされてしまいます。しかし、この言葉には前置きがあって「学問は喧嘩ではなく、格闘技である。」というわけです。闘っていることには間違いありませんが、ルールのない喧嘩ではなく、ルールを守ったスポーツなのだという話です。

### 2. 背景

この言葉はゼミの先生が授かった言葉です。もとをたどればカール・ポパーの原理に基づいています（決してポパーが言ったわけではないと思います）。「ポパーは古いよ、モダニストだよ」と思っている方は、多いかと思えます。しかし、私にとっては偉大です。モダニズムの最高到達点だと思っています。彼の示した批判的合理主義は以下の図式に表せます。

ST.1→P1→TT.1→EE→ST.2→P2→…

ポパーは、科学的知識を、より多くの事象を説明できる命題とします。ただ、それがより多くの事象を説明できる命題であっても、その命題は永久に正しいとは限らないわけです。それは一つの可能性であり、いつでも批判可能な知識です。すなわち、科学的な知識（ST.1）とは、それが説明できない事象が発見された場合（P1の発生）には、それを説明するための知識の仮説（TT.1）が立てられ、その誤りを指摘しようとするあらゆる問題を取り除き（EE）、また暫定的な科学的な知識（ST.2）となるわけです。これが無限に行われる可能性を保障することこそ科学＝学問だというわけです。

こうした可能性を保証するため（すなわち学問を成り立たせるため）には、一定のルールが必要です。いくつかありますが、代表的なのは「反証可能性」です。すなわち誰しにも批判可能性が残されていることが必要だというわけです。それがルールのある格闘技だといわれる所以です。

### 3. 考察

でもそれは学問の話でしょ。教育とはなんの関係があるのさ！こんな疑問が浮かぶでしょう。ポパーの反証主義は、科学論を超えて社会論に射程を拡げます。大きくは立憲主義を支える大原理です。批判可能性のない世界、これはどんな世界でしょう。

そんな大きい話をされても…という声が聞こえてきます。もっと日常の教育にも拡げることとも可能です。ルールなき授業研究会なんてそこら中にありそうです。ここの解釈は各々自由です……。

参考文献

関雅美『ポパーの科学論と社会論』勁草書房、1990年

橋爪大三郎『民主主義は最高の政治制度である』現代書館、1992年